

奈良時代の書状データベースをめぐって

Consideration on Nara period letter database

黒田 洋子

Yoko Kuroda

奈良女子大学古代学学術研究センター

〒630-8506 奈良市北魚屋東町 奈良女子大学コラボレーションセンター2F

Kitauoyahigashimachi Nara City

Nara Women's University Collaboration Center 2F

近年、史料の所蔵機関による写真公開が増加し、研究者の利便性が高まっている。その中で新たな研究方法を開拓する一つの試みとして、奈良時代の書状の一字ごとの画像検索システムを構築中である。従来の研究史の問題点を整理しながら文献史学に立脚した視点から、この検索システムの必要性・有益性について述べる。

今まで古代の文字についてはあらゆる用途の文字をまとめて論じてきたが、用途別に分析すること、書体ごとに分析すること、それにより実用面の分析という可能性が開かれる。楷書で書かれた経典や公文書よりも、草書で書かれた書状のほうが書き手の書風や教養を直接反映するため、研究対象として適していることなどにも触れる。

Recently, the more openings of the historical records photographs to the public by many institutions, have brought more convenient situations for researchers. To look for a new research method using them, we are creating the system that can search for each one character of Japanese ancient letter.

First of all, this report analyzes the problems of the research until now, and describe the importance, necessity and usefulness of this system.

Letters written by cursive script are more suitable for research material than Buddhist scriptures and documents of public office because it reflects directly the style, knowledge and culture of writers.

キーワード:奈良時代, 正倉院文書, 書状, 草書体, 一字検索

Keywords: ancient, Nara period, shosoin documents, letter, calligraphic style, cursive script

1.はじめに

現在、奈良時代の書状について一字ごとの画像検索システムを作成中である(1)。本報告ではその作成の意図や現在の文献史学上における意義について述べてみたい。

日本の歴史・国文学関係の資料データベースについては枚挙にいとまがない。本報告で紹介・整理するまでもなく、「日本文学インターネットガイド」のホームページに主立ったものが並んでいるのでそちらを参照されたい(2)。日本の資料のみならず漢籍資料についても、国内では東京大学大学院人文社会系研究科次世代人文学開発センター・萌芽部門・データベース拠点による大正新修大蔵経テキストデータベースや京都大学東アジア人文情報学研究センターの各種データ、あるいは海外の代表的なところとしては台湾中央研究院の漢籍電子文献など有用なデータベースがあることは周知の事実であろう(3)。

*正倉院文書関係の大型データベース

筆者が専門とする、正倉院文書に関するデータベースに関してだけでも、今現在において、東京大学史料編纂所を筆頭に、佐倉の国立歴史民俗博物館、大阪市立大学正倉院文書データベース作成委員会の三者が大型データベースを構築している。

東京大学史料編纂所の正倉院文書マルチ支援データベースは、同編纂所が長年にわたる調査によって蓄積し、目録化してきた、詳細な書誌学的情報をデジタル化したデータベースである。

国立歴史民俗博物館では、研究機能のほかに博物館という公開・閲覧機能を担う施設の性格上、画像閲覧機能にも開発の力が注がれて超高精細画像による閲覧が可能になった。それと同時に同館が独自に行った調査による詳細な書誌学的情報も盛り込まれ、その検索機能をも兼ね備えている。従って研究者のニーズにも十分対応する、完成度

の高いデータベースとなっている(4)。

以上のように正倉院文書に関しては、公的な研究機関による大型のデータベースの構築がここ数年の間に著しく進展した。

*文字画像データベース

一方、字体や書体の研究を行うには一字ごとに画像を検索することのできるシステムの構築が欠かせない。

史料の文字画像を一字ごとに検索できるデータベースとしては、すでにいくつかの研究機関・研究グループによって構築がなされている。

東京大学史料編纂所は、正倉院文書を含む古文書・古記録からの一字ごとの切り出しデータベースの作成を進めている。

また奈良文化財研究所は木簡の文字の一字検索システムを構築したが、奈良文化財研究所と東京大学史料編纂所とが連携して、現在は両者の連携検索が可能となっている。

石塚晴通氏を中心として構築された「漢字字体規範データベース」は、長年にわたり経典類から膨大なデータを集積して構築されたデータベースである(5)。

その他、京都大学東アジア人文情報学センターの「拓本文字データベース」なども独自のシステムを導入して構築されており、大変興味深く、かつ有用である(6)。

以上のようにすでに膨大なデータが集積された大規模なデータベースが動き出した中で、奈良時代の書状という括りの中で小規模なデータベースを作成している。奈良時代の肉筆史料であれば、いずれも重要な史料的価値をもつものであるが、今回あえて書状と言う括りを設定したことについて、以下でその意義を述べてみたい。

2. 奈良時代の書状

*史料としての性格と重要性

正倉院文書の中には、奈良時代の官人の書いた書状が約250点存在する。書状は、帳簿や文書といった公文とは性格を異にする史料である。公文については公式令(くしきりょう・律令の中の、公文書の様式や施行細則を定めた法令)に書式等の規定があるが、書状に関しては規定がない。また、公文を記す際には正書=楷書体で記すことが公式令に規定されているが、書状には書体の規定もない。八世紀の官人が書いた実例を正倉院文書に見ると、帳簿や文書といった公文に関しては楷

書体で書いている。一方書状に関しては、公文とは異なる書体を用いる、という認識を持って記しており、両者の書き分けが見られる(7)。同一人物が公文は楷書体で書き、書状は草書体で書いている例も見られる。草書体のみならず隷書風の書体で書いたものも散見する。

中国においては、伝世史料においても出土史料においても、同時代に於ける経典や公文などの楷書体資料は多数残存しているが、楷書体以外の肉筆資料というのは少ない。伝世史料の中で知られている楷書体以外の資料は、ほとんどが榻写や模刻である。また近年楼蘭あるいは敦煌・吐魯番から多くの写本や文書類が出土したが、その中にある草書体で書かれたものは少ない。草書体と同様に、隷書体で書かれた肉筆資料も経典などの写本類を除けばあまり知られていない。

要するに同時代における楷書体以外の肉筆史料は、漢字文化圏全体を通じて見ても希少であるが、正倉院文書の書状の中には相当数の楷書体以外の肉筆史料が含まれているのである。

3. 従来の研究における問題点

書道史研究は芸術の分野におかれているため、美術史の観点から進められてきた。文献史学の研究者は専門外ということで、書道史家の見解に依存するしかなかった。それによって、実は重要な史的事実を見落としていることにも気づけないままであった。以下にその問題点を挙げておく。

*用途別に分析する視角の必要性

元来、書は用途や目的によって異なる書体を用いるものである。現在は篆・隸・行・草・楷の五体を基本としているが、用途ごとに六体または八体あるいはそれ以上に細かく規定されている時代もあった(8)。

石碑や扁額は時代的変遷があるものの、正書である隸書が基本であるし、経典は楷書、公文は実用楷書、書状は行草書、というように目的や用途に応じて書体が選択される。すなわち書体はそれ自体が情報を伝達する重要な要素であった。それゆえ書体情報を考慮することによって、文字情報以外の情報をも引き出せる可能性がある。

ところが古代の文献史学においては、書や文字を論じる際、碑文や鉄剣銘などの金石史料から、経典、法帖・文書や帳簿といった公文類など、すべてをひっくるめて比較・検討されているのが現状である。古代の場合、史料の全体数が少なく、

比較対象が少ないとはいえ見当違いの議論になりかねない。

*書体を識別する必要性

奈良時代の書について従来の説を紹介したい。隣国の唐においては太宗が王羲之の書を崇拜し愛好したことから貴族・一般社会にもその愛好の風潮が拡大・浸透した。

唐の文化に倣った我が国においては、八世紀中頃の東大寺献物帳に王羲之「書法廿卷」や光明皇后が王羲之の書を臨書したとされる楽毅論の記載が見えることや、官人達が記した正倉院文書の文書や帳簿についても王羲之風の書風が伺えると言われている。このことから、皇室をはじめとして一般社会においても王羲之の崇拜・愛好の文化が普及・流行したとされている(9)。

確かに、皇室の周辺においては、献物帳に王羲之の「書法廿卷」などが見えるから、唐の文化の最先端として王羲之の書に対する興味が存在したのであろう。しかし、貴族層を初めとする一般社会において王羲之のテキストが普及していた形跡は史料上確認できない。

また、王羲之の法帖は行書・草書のもので大半を占め、楷書のみは僅かである。唐の太宗が崇拜・傾倒し、社会にもその風潮が浸透していたというのは、王羲之の行・草体のことであり、唐の社会で憧憬的である王羲之の書といえ、草書体の尺牘類が主であった(10)。

一方、正倉院文書の帳簿や文書といった公文を記すのに、官人が用いたのは楷書体である。

以上のことから日本の一般社会において、唐と同様に王羲之が流行していたというのは書体を混同して導き出された説であり、また史料の根拠にも乏しいといえることができる。こういった通説に対しても、文献史学の立場から今一度詳細に検討する必要があるであろう(11)。

*書体の本質

元来、書道史研究は芸術を対象として行われるものであるから、美の観点から書を理解することを目標とする。しかし書は芸術の対象としての役割以前に実用的な役割をも担うものである。

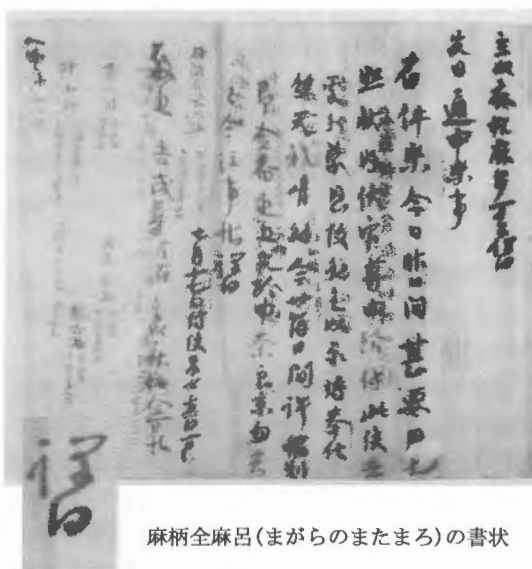
文字は意味を形象化するものであるが、書は文字にさらなる情報・発信者の意図を付加する。いわば伝達手段の一要素である。すなわち文字の形のみでなく、書体の認識あるいは選択が情報手段として文字の一翼を担うのである。にもかかわら

ずこの書体の本質的な役割に対して、今まで文献史学の側からはあまり注意が払われてこなかった。

特に正倉院文書においては、公文であるのか書状であるのか、文書様式のみではその性格が判断不可能な文書が数多く存在する。こういった文書の性格や発信者の意図を正確に把握する上でも書体は一つの判断指標になりうるものであり、重要な情報源となりうるのである。

*実用書を分析する必要性

文献史学者は、芸術的価値の高い書のみでなく、あらゆる史料から情報を引き出す覚悟を持たなければならぬ。



麻柄全麻呂(まがらのまたまる)の書状

今まで「稚拙な字」として注目されてこなかった書の中にも、貴重な情報が隠れているものがある。例えば、麻柄全万呂という下級官人の書状を見ると、草書で「謹」という文字が書かれている。これは正倉院文書の書状の中でこの人物の書状だけに見える、古い草書体の貴重な例である。

このように今まで書道史研究の対象とされてこなかった下級官人の書いた実用書の中にも、多くの興味深い事実が数多く存在するが未解決のまま放置されている。

以上、文献史学から見た書道史上の問題点についてまとめてみた。

奈良時代の書については、天平写経に見られるように隋唐風の先進文化の受容・反映が見られる反面、官人達の書の中には古い六朝風で隷書の要素が残る、という通説的見解もある。こういった通説的見解においては、当時の日本人がどれだけ唐の先進文化を受容してそこに到達していたのか

という、いわば唐の文化を尺度にしての評価と言う点に終結している。

しかし、文献史学においては到達度で書を見るよりもむしろ、そこに留められた要素、そこに映し出されている要素の歴史的価値や要因を明らかにする分析視角こそが必要ではないだろうか。そこから当時の文化の諸相・実態をより明らかにすることが可能になるのではないだろうか。

以上の点から、従来の芸術の対象としての書道史とは異なる、今まで顧みられることがなかった実用的な書道の歴史を切り開く必要があると思われる(12)。

そしてこのような書の実見・観察に基づく研究は、史料の画像公開が普及するまでは不可能であった。ここ数年で公開が進んだからこそ新たな研究方法の可能性が見いだせたのである。

では奈良時代の書を分析するのに、なぜ楷書体史料ではなくそれ以外の書体を含む書状から始めるのかと言う点について、以下に述べてみたい。

4. なぜ書状なのか

まず、楷書で書かれた史料、経典類と公文類について述べる。

写経というのは経典を書写する人がテキストの書風や書体・字体をそっくりそのまま写し取る。極端な場合テキストの誤りさえもそのまま書写するから、今でいうところのコピーの役割を果たすものである。従って経典の場合、その書風と言ってもどれくらい書写した人物の時代性を映し出すものかはわからない。

次に公文類について述べる。律令国家は官人に対して、公文を記すための書記技能教育を徹底して行った。正倉院文書における写経所官人の新人教育システムなどを見ると、公式令の規定に従うべく公文の書式・用語から始まり用字法などが新人官人に対して徹底的かつ統一的に施されている。公文の書体も実用的な楷書で画一的である。したがって記載した官人本人の持つ書記能力や教養、時代性などを見いだすのは甚だ困難である(13)。

以上のように、楷書体で書かれた経典や公文からその時代の書風であるとか、書の能力を論じるのは実は、非常に困難であると言わなければなるまい。

これらに対し、書状はテキストを書写したもので、公式令にのっとって画一的に書かれたものでもない。書記者がルーティーンとは異なる突発事項に対し、独自に記したものである。記した人

物が持っている、文字や言葉や書に対する知識や教養を直に反映させた史料であるといえるのである(14)★。すなわち奈良時代の書の能力を知る上で余分なフィルターを一切通すことなく直接その実力のほどを分析することが可能なのである。

5. まとめ

以上、文献史学における奈良時代の書状データベースの構築の意義や必要性について述べた。

今まで奈良時代の文字と書体については文献史学の立場からあまり研究されてこなかった。

現在、構築した検索システムを使用しながら、奈良時代の草書の習得状況を考察している。奈良時代の文字周辺の、通説とは異なる新たな様相が明らかになりつつある。その成果については別稿を予定しているが、ここではデータベースを充実させるための今後の課題について述べておきたい。

小規模なデータベースであることによって、試行錯誤を繰り返しつつ、実験的に構築していくことが可能であるという利点がある。それゆえデータベースを実際に使用しながらの、必要項目の追加、あるいは修正が可能である。

まず、データ上の課題について述べる。

①正倉院文書の中で、同一人物が書いたものが複数存在する場合、現在は文書情報として項目に加えてあるが、それらの画像も連携させて検出できるようにする。

②同時代史料の中で、草書体の史料の一字検索が可能となるように、他の草書体史料を付加していく。

次に検索システム上の改善・修正点について述べる。

①画像データの他に釈文・書誌学情報の選択および表示方法の工夫と改良

②他の史料との共通項データを抽出する際、付随情報の刷り合わせと表示方法の工夫と改良

③一般ユーザーへの対応

最後に、このデータベースの他の分野での有益性について述べておく。木簡との連携検索が可能であることで、木簡等に読みづらい崩し字があった場合に解読に役立ることが可能である。他の史料、たとえば尺牘類には模刻を重ねて解読不能になっている文字が数多くあるが、今後草書体資料を付加し充実させていくことで、そういったものの解読にも役立ることが可能である。

以上のようにこのデータベースの実験的構築と充実に、他方面の研究分野に貢献することも期待したい。

脚注；

(1) データベースの作成に関しては、既に木簡の画像切り出しソフトの開発を独自に行っている奈良文化財研究所との共同研究により行っている。従って同研究所においては木簡と連携して検索・閲覧することが可能である。

書状も書体も、平安時代に入ると全く様変わりしてしまう。そのためにも奈良時代という括りで見極めておくことが非常に重要である。

(2) <http://densigatoru.shidareyanagi.com/>

(3) データベースの公開以外にも国立国会図書館のデジタル送信システムを初めとして、史料自体の写真の公開が各所蔵機関によって進められていることは研究者にとって多いに利便性がある。またネット上の公開以外に大部の史料をデジタルデータ化したCD-ROM版も多数販売されている。

(4) 三つめに挙げた正倉院文書の大型データベースとしては、大阪市立大学正倉院文書データベース研究会によるSOMODAがあるが、各種の情報を全て盛り込もうとしたために残された課題も多い。

(5) <http://joao-roiz.jp/HNG/>。石塚晴通編『漢字字體史研究』2012年、勉成出版。

(6) <http://www.kita.zinbun.kyoto-u.ac.jp/data base/>

(7) 黒田洋子「「啓」の由来と性格 ―書状の三つの要素から―」（2015年11月15日東京大学史学会古代史部会報告）

(8) 中田勇次郎『中国書論集』、1977年、二玄社

(9) 『正倉院の書蹟』、1964年、日本経済新聞社

(10) 楷書体に関しては唐代に入ると、虞世南・歐陽詢・褚遂良らの書が流行の主流であり、楷書の手本・スタンダードとして浸透していたと考えられている。

(11) 百歩譲ったとして、官人らの書いた書の中に王羲之の作風が認められるとしても、それは八世紀の日本において王羲之が愛好され、王羲之のテキストを学習・習得したためではなく、唐の一般社会におけるスタンダードな書風が一般社会を通じて波及してきていたためであり、王羲之の書の直接的受容の結果とは考えられない。

なお、正倉院文書の中の書状などに見られる草書体は個性豊かで、それらは王羲之の書風とは一概に捉えられるものではない。

(12) 五体の成立についても付言しておきたい。篆・隸・草・行・楷の五体のうち、楷書は唐代の褚遂良の三過折を以て成立すると見るのが書道史の考え方（＝芸術としての完成を成立と見る考え方）である。実用上においては我々が使っている楷書体に近い字はすでに後漢のころに見られるし（隸書＝正書としてこれらを捉える研究もあるが）、草書的なものも存在するのであるから、実用面での書の変遷というものを根本から捉え直す必要がある。

(13) 書きぶりが中国西域出土の公文とも類似しており大陸由来の書記システムに倣ったか。

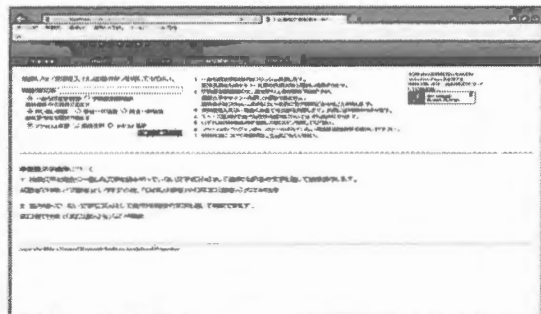
(14) さらに、正倉院文書は、書状周辺の文書や帳簿も残っているので、書状が書かれた諸事情まで明らかにすることができる世界的に希有な史料群といえる。

附記1：現在、試験的に閲覧運用を開始したが、一字画像に関しては正倉院事務所の使用許可が下りたが、文書の全体画像の公開については許可待機のため、奈文研及び奈良女子大学古代学術研究センターでのみ閲覧可能である。

附記2：本報告は日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C)「書状文化の源流を求めて」（平成24年度～27年度、研究代表者黒田洋子）の研究成果の一部である。



1. トップ画面



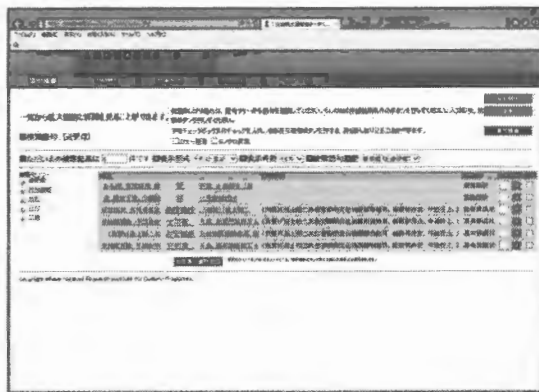
2. 簡単検索画面



3. 詳細検索画面



4. 語句検索画面



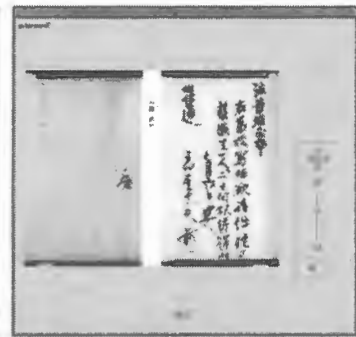
5. 語句検索 → 結果一覧画面



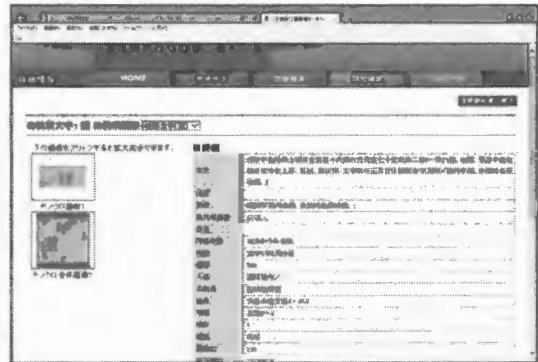
6. 一字検索 → 結果一覧画面



7. 拡大画面
(指さし付き)



8. 全体画像画面
(裏封アリのもの)



9. 詳細情報画面



10. ユーザーメモ書き込み画面



11. 挨拶画面